

『鳴かすのカッコウ』

手嶋龍一 小学館 1870円

本作の舞台である公安調査庁は、「最小で最弱の諜報機関」とも揶揄される陽の当たらない存在だ。職員的主人公・梶太もまた、地味な漫画オタクの青年で、仕事ではさしたる実績がない。しかし、彼はふとしたきっかけで、北朝鮮やウクライナの組織が入り乱れる国際諜報戦線に足を踏み入れることになる。



壮太は実は、一度目にした光景をその細部まで記憶する「映像記憶」という特殊能力の持ち主だった。その能力と持ち前の忍耐力をもとに「アラビアのロレンス」に憧れる才女

をはじめ多彩な同僚と諜報活動を進め、ついに大きな実績をあげる。外交ジャーナリストでもある著者は、中国が糸を引いているとされる軍事密輸をはじめ、実際に起きている国際問題に想を得ており、細部の描写も綿密だ。娯楽性と社会性が理想的に重なり合った一級のミステリー小説である。

(若林 良)